

News Letter

2008

No.20

News Letter 2008 No.20
Index

はじめに	2
省農薬ミカン園について	3
今年のゼミ勉強会	4
ミカン園と共に歩む	5
新人レポート～毛利の場合	7
新人レポート～日高の場合	8
「食」について考える	9
「省農薬」とは	10
昨年のアンケート集計結果	11
おわりに	12

はじめに

太田 健

今年もミカンの季節がやってきました。この News Letter を読まれているとき、もうすでに今年のミカンと顔を合わされていることかと思います。どんな表情をしているでしょうか？ 口に含んだとき、どう思われたでしょうか？ 去年の省農薬ミカンとは少し見た目も味も違うのではないですか？

農薬ゼミのメンバーは毎年のミカン収穫を楽しみにしていると同時に、実は毎年すごくドキドキしているんです。カイガラムシがたくさん発生してミカンに付いてないか、酸味と甘味のバランスはどうか、台風が来たから落果して粒数が少なくなっていないか、粒の大きさはどうか。毎年微妙に変わる省農薬ミカンをわが子のように心配し、見守り、送り出しているんです。

そんな「ドキドキ感」も私にとって早くも四回目です。この前一番下だと思っていたのに、もう大学卒業の年になってしまいました。そんな光速で過ぎ去った日々でしたが、四年もたつとこんな私でもものごとを考えるようになります。「なぜ、毎年そんな違いが出てくるか。」…おそらく答えはそこまで難しいことではありません。日照、降雨はたまたま裏年・表年、その年の気候や自然の摂理がそうさせるわけです。ただこれと同じことでも違う言い方をすれば、「このミカンはその年の自然環境の集約」などと、そう言えるのではないかでしょうか。正直に言うと大学に来るまで、家でみかんを食べて酸っぱかったらハズレだといい、甘かったらアタリだという、そんな捉え方しかしていませんでした。しかし、「一年の自然環境の集約」なんて大げさな言い方をすれば、ハズレであって口に含んだ瞬間、想像力が沸き立ち面白い。今年はどんな年だっただろうかと。もっともこれは私独自のミカンの捉え方でしかありませんが、省農薬ミカンを通じて農薬ゼミが伝えたいことに近いとも思っています。省農薬ミカンの意味とも言えるかもしれません。

省農薬ミカンの意味。そう言うとどこか偉そうで、みなさんにも支えられて成っている農薬ゼミとしては恐縮なのですが、これからもそれを伝えていきたいと考えています。私は今年で卒業です。今年は何人かの新人も活動に加わってくれました。後ろ髪引かれる思いですが、来年以降は彼らに任せたいと思います。ミカンの栽培・販売に関わることも彼らにとって初めてのことです、まだ「ドキドキ感」なんかないかもしれません。初めてだという意味では純粋にドキドキしていると思います。彼らの成長にはみなさんのご協力が必要です。是非、これからも暖かい目で農薬ゼミを見守っていただきたく思います。(おおたけん=農学部4回生)

*みかんには隔年結果と呼ばれる現象が起きます。簡単に説明すると一年おきにミカンがよく取れる年、それに比べて取れない年が回ってくるのです。そのうち、よく取れる年を「表年」、取れない年を「裏年」と言います。

省農薬ミカン園について

和泉 賀津子

省農薬ミカンが生まれるきっかけとなった出来事は、1987年7月14日和歌山県海草郡(現海南市)下津町大庭で、松本悟くんという当時17歳の青年が農薬中毒で急逝したことに始まります。

悟くんは、松本武(1999年死去)・エツ子さんの長男であり、省農薬ミカン園の持ち主である仲田芳樹さんの場にあたりますが、害虫防除のためにフルオキシの農薬ニッソール(日本曹達株式会社製造販売、現在は製造中止)を散布したのち、中毒にかかり、3日後に亡くなりました。

ニッソールは、低毒性をうたい文句に日本曹達が大々的に宣伝した農薬でした。松本武さんは、悟くんが當時考えられる最も完全な服装で作業をしたにもかかわらず中毒したのは、農薬を撒いた本人の責任ではなく、農薬の安全性の問題であるとして、89年にニッソールを製造販売した日本曹達株式会社と、それを許可した園を相手取り民事訴訟を起こしました。

当時は、高度経済成長のまっただ中であり、大量生産大量消費が大きな価値であるという考えが大勢を占め、大量の農薬を使って多くの作物を作ることに何の疑問も抱かなかった時代でした。そんな時代背景の中で、農薬会社と園を相手に損害賠償を求めた裁判は、77年和歌山地裁で完全敗訴となります。しかしその後78年に大阪高裁に控訴し、84年の最終弁論の後、裁判所から和解の打診があり、85年に和解がなされ、日本曹達株式会社から和解金(賠償金と考えています)が支払われました。最後まで園の責任は問われませんでしたが、農薬会社が公に和解金を支払ったのはこれが初めてであり、大きな成果でした。17歳で亡くなった悟くんが、17年間の裁判をご両親と共に戦った結果でした。松本さんは、その時のわずかな和解金で、ミカン園に小屋を建ててくださいました。小屋は、「悟の家」と名付けられ、その後のゼミ活動の拠点となっています。

さて、裁判を続ける中で、仲田さんが新しいミカン園を開くことになり、農薬を使わずに栽培してみようということになったのが、省農薬ミカン園の誕生です。裁判を始めて5年後のことでした。

開園後2~3年でミカンの出荷が始まります。農薬ゼミが現行の調査を開始したのは78年からです。

その当時のミカン園は、樹が枯れてしまうのではないかと思うくらい害虫がたくさん付いており、また雑草や土の問題も多くありました。農薬ゼミは、年に数回、ミカン園に通い、夏と秋の病害虫調査を続けながら、試行錯誤を繰り返していました。草刈りやクローバーの播種、土作りのための堆肥投入、樹の混み合い改善と作業の効率化のための間伐などなど。最も大きな成果は、86年の天敵導入であり、この天敵の導入により害虫は激減し、現在は本当に害虫が少なくなっています。

普通のミカン園では、年間に十数回の農薬散布が行われますが、省農薬ミカン園では可能な限り農薬を省いた栽培を続けています。

ミカンの樹の寿命は、人間と同じくらいとされていますが、最初に植えた樹は35歳になり、働き盛りです。収量は増え、味も良くなり、多くの方に省農薬ミカンをお届け出来るようになりました。

このミカンを通して、日本の農業のあり方や食べ物のことを考えるきっかけにしていただければ幸いです。(いづみかつこ=京都市職員)



今年のゼミの勉強会

富山 博喜

こんにちは。四回生の富山です。今年のゼミの勉強会を振り返ってみます。

農薬ゼミは普段は、金曜の夜に集まって勉強会をやっています。勉強会の内容ややり方は良く言えば個人の数量に任せて、悪く言えば統一感が無くばらばらです。

今年の勉強会については、最初に農薬の作用機構について勉強しました。農薬が効くメカニズムを科学的に知ることで、農薬がどのくらい危険なのか、あるいは安全なのかということを理解できると思ったからです。次に家庭に潜む農薬について勉強しました。いわゆるシックハウスの原因となる物質がどういうものかというのを知り、自分なりの対策を立てられるようにするためにです。他にも持続性の高い農業を行なう人に与えられる称号であるエコファーマーや、和歌山県のミカンの農作業の流れ、またAMITAという会社で働いている方に来てもらってAMITAの環境に対する取り組み等を話していただきました。

各回のテーマは担当するゼミ生が興味のあるものを選んで、調べて発表します。ゼミ生は学部も学科も異なっているので当然興味のあるテーマも異なります。それはそれで面白いのですが、そうなるとある人は化学の基礎は全く知らない、またある人は生物の基礎は全く知らないといったこともあります。その結果、発言できなかつたり、発言をためらつたりしていたのではないかと思います。人数もあまり多くないので、堅苦しくならず、もっと軽快のような感じにしたいと思います。初歩的な質問だからといって黙つておくのではなく、むしろそういう質問をすることで雰囲気を出すほうが重要ではないかと思います。

ここ数年の反省としては、あまり新人が来なかつたので、教育という事をあまり考えてこなかつたような気がします。農薬ゼミとしてこれだけは知っておかなくてはならない基礎科目を改めて見直して、新しく来た人が体系的に勉強できるようにしておけば良かったと思います。そこで後期の勉強会では『食と農の歴史』という本を読んでいます。一回生やあるいは農学部以外の人でも

ったく農業について知らない学生でもある程度は、農業というものを理解できるようになれば幸いです。(とみやまひろき=農学部4回生)



ミカン園と共に歩む

小川 詩乃

皆様のお手元に届いている省農薬ミカンは主に仲田さんが栽培などの農作業を行い、私たち農業ゼミが調査や販売などを担当しています。「農薬は省くべき存在であるが、省き方は色々あるだろう。風土により、栽培作物により、農家の技術によって省き方は異なるだろう。」という考え方から『省農薬』という看板が生まれました。

省農薬ミカン園は、1973年に和歌山県海南市下津町にある大庭の山でもいちばん高い標高が350メートルの雑木林を開墾して作られました。ミカン栽培には少し標高が高いのですが、当時農薬を減らすことは害虫や病気が大発生するリスクがあったために、他の農家さんの園に近接しているところでは省農薬を実践することが出来なかつたのです。

農業ゼミは省農薬ミカン園をフィールドとして、農薬を減らした栽培下ではどんな病気や害虫が発生するのかを調べる調査を1978年から継続して行ってきました。

最もミカンへの被害が大きい害虫であるヤノネカイガラムシは体長がわずか3.5ミリですが、ミカンの木に多数寄生すると樹勢を弱め、枯死させることもあります。ヤノネカイガラムシは1年で2度産卵します。ミカンの木の上で冬を越した成虫(越冬成虫)が4月下旬頃に産卵し、5月中旬頃から発生していく幼虫を第一世代と



生産者:仲田芳樹

今年の使用農薬

・ジマンダイセン
(6/15~17 使用)

・除草剤
(7/16,17 使用)

ジマンダイセン

ジマンダイセンとは殺菌剤で、有効成分はジチオカーバメート系のマンゼブです。果樹の黒斑病、さび病などに使用されます。

呼びます。そしてこの第一世代は7月上旬頃に産卵して第二世代の雌が越冬して翌年の発生源になります。そこで第一世代、第二世代がそれぞれ肉眼で観察できる成虫となつた、7月末と11月に病害虫調査を行っています。調査方法は1本の木について全体を見てまわり、また枝を持ち上げたり木の下に潜り込んだりして、ヤノネカイガラムシを含む害虫や病気(カビなどにより葉や果実の外見が悪くなっている)を探し、程度を大まかに把握して5段階のランキングによって表す「見廻り法」を採用しています。

省農薬ミカン園には約1000本のミカンの木があります。調査開始当初は省農薬ミカン園の中でも土が悪いために木の背丈も低く、病害虫の発生度が高くなっている500本を対象にスタートしました。1986年にヤノネカイガラムシの天敵であるヤノネキイロコバチとヤノネツヤコバチの導入に成功しヤノネカイガラムシの発生頻度が一定に抑えられたことを踏まえて、現在はランダムに選んだ50本を対象に調査を行っています。現ゼミメンバーの大半は現在の調査体制になってから農業ゼミの活動に参加しているのですが、50本を調査するだけでも骨の折れる作業です。この10倍もの木を調査していたなんて考るだけでも気が遠くなりそうです。

1996年に省農薬ミカン栽培の可能性について病害虫被害解析と経済分析を行った調査報告書「省農薬ミカン栽培の可能性」を出版しました。この中で、農薬を慣行栽培で使われる量より減らしても、天敵導入など工夫すれば、病害虫によってミカン園が壊滅することはない証明しました。また社会的にも、「省農薬」はまだ浸透していませんが、「無農薬」「減農薬」「有機栽培」など農薬のみに頼ることのない農業が盛んになってきました。

その後、農業ゼミは1999年にはミカンの木の成長による密植状態を改善するためにミカン園の一部に間伐区を設けて病害虫・収量の増減を調査し、2004年には作業効率向上のために大規模な間伐を行うなど農業以外の観点からも活動を行ってきました。

今後の課題の一つに、間伐区に関する調査データを分析して省農薬ミカン園に還元し、社会に浸透していくことが挙げられます。農業従事者の高齢化が進む現在、間伐をしても日当たりや風通しが良くなることで収量の激減を抑えられることが証明出来れば、農業従事者の負担の軽減につながると考えられます。

これからも省農薬ミカン園と共に歩み農業ゼミの活動をより有意義なものにしていきたいです。(おがわしの=理学部4回生)



新人レポート

毛利 宗一郎

今年の五月頃から農業ゼミの活動に参加している理学部一回生の毛利宗一郎です。私が農業ゼミに入るきっかけとなったのは、環境・農業系のサークルの合同説明会です。その前から農業ゼミの存在自体は知っていたのですが、農業ゼミに入るとは思っていませんでした。ゼミという言葉から、難しいことをしてて硬い雰囲気のサークルだと思っていたからです。ところが、合同説明会に行ってみると農業ゼミのアットホームな雰囲気に入りたいと思うようになりました。

こうして、農業ゼミにはいったのですが、農業や農業について知らないことだらけです。香川の田舎で育ったのですが、田んぼで野球をすることはよくあっても、農作業を行ったことはほとんどありませんでした。毎週金曜日のゼミでも初めて知る言葉や情報が多く出てきて非常に新鮮です。

8月にはミカン山での調査活動に初めて参加しました。私がイメージしていたほどガチガチした調査ではなく、休む時は食事やお酒を楽しみながら休み、調査するときにはきっちりするといった、メリハリのきいた活動でした。2泊3日の調査で、初日の夕方に出発し和歌山のミカン山に行き、2日目に調査をし、3日目に帰るといったスケジュールです。2日目の調査でミカン山が初めての私は先輩からミカンの木につくカイガラムシや病気についておしえていただき、午前中は4人1組での調査をしました。カイガラムシは小さいので、気をつけて探さないと見逃してしまいます。私は気付けていても、かなり見逃していたと思うのですが、富山先輩の珍しいカイガラムシであるツノロウカイガラムシを見つける能力には恐れ入りました。午後になると、普段ほとんど運動していない私は強い日差しの中、密集したミカンの木の間を移動するといった調査にかなりへばりました。その分、すべての調査を終えた後の、ミカン山から見た海の景色、その日の夕食に食べた焼き肉は格別でした。

農業ゼミで活動するようになって、最も痛感させられることが自分と先輩との差です。農業や農業、環境問題などについての知識はもちろんのこと、教養の豊かさ、話のうまさ、パソコンを使いこなす能力に至るまで先輩方に及びません。前期は受け身の活動が多かったのですが、後期はゼミでの発表など1回生にも役割が回ってくるようになります。先輩方に少しでも追いつき、農業ゼミの一員として役立てるように気を引き締めていきたいです。遅刻して迷惑かけたりしないように…。(もううそういちろう=理学部1回生)



新人レポート

日高 渉

農業ゼミの活動に参加し始めてから、半年ほどが経ちます。週に一回開かれる勉強会では、毎回新たな知識を得ることができ、新鮮な刺激を受けています。下津のみかん園には、まだ、5月の一度だけしか訪れる機会を得ていませんが、それでも、みかん園で得た印象は様々あります。

下津のみかん園は山の斜面にあり、そこからは、西の方角に海を眺望できるため、熊本県の天水を思いだせます。天水は、下津と同様、山でみかんを栽培している県有数のみかん産地であり、また、山からは西の方角に、海を望むことができます。つまり、天水は下津といつかの共通点を持っているのです。もう少し詳しく天水について述べますと、天水は夏目漱石の「草枕」の舞台となつた所であり、また、俳優の笠智衆が生まれ育つた所もあります。町には、笠智衆のような櫻やかさがあり、「草枕」の文章を借用すれば、俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる所です。天水には、私の実家から割合近くにあるため、よく好んで訪れていました。そういうこともあり、下津は、初めて訪れた土地でしたが、より親近感が得られました。下津も、心をおだやかにさせてくれるように感じます。

みかんの生産者である仲田さんから感じた印象について触れようと思います。仲田さんの手は、日に焼けた、筋くれた、大きな手をしています。私は、失礼ながら、思わずじつとその手を見つめてしまいました。よく、推理小説で、探偵が手からその人の職業や癖を推理する場面がありますが、手にはその持ち主の様々な特徴があらわれます。そして、仲田さんの手は、まさしく農業に従事されている方の手であり、それも、長年真摯に取り組んでこられた方の手でした。みかん園と農業ゼミは、もう30年以上になるそうですが、その歴史の長さを感じました。

(そういえば、余談ですが、緒形拳さんは、「手が人より、大きくて『手』じゃねえなあ。これは、『拳(こぶし)』だ。ということで、『拳』としたんだけど、みんな「けん」と読むんです。今でも、私は「こぶし」だと思っていますが」と、手の大きさを自分の特徴と考え、芸名をつけたと語っていました。)

(ひだかわたる=農学部1回生)



「食」について考える

松村 実咲

なぜ農薬ゼミのみかんを買っていますか？

はじめまして。今年の春から農薬ゼミに参加しています、京都大学3回生の松村実咲と申します。この度は、農薬ゼミの省農薬みかんをお買い上げいただきありがとうございます。突然ですが、皆さんはなぜ省農薬みかんを選んでいますか？

選ぶというほどの意識もなく付き合いで買っていたいしている方から、市販のみかん、無農薬のみかん、有機栽培のみかん etc…の中で農薬ゼミの省農薬みかんを選んでくださっている方まで、様々な方がいらっしゃると思います。選ぶ基準といえば、味や値段、消費者および生産者の安全性、農薬ゼミの活動への理解といったところでしょうか。なんにせよ、お買い上げいただいたことに心から感謝申し上げます。

さて、省農薬みかんを召し上がりながら、ぜひ考えていただきたいことがあります。それは、農薬が使われた食材が、それを食べた人に及ぼす害についてです。農薬の毒性は確率で表され、それが使われた食材の毒性も確率で表されます。確率といわれて、皆さんは何を連想されるでしょうか。私は数学のややこしい計算式が思い出されて、憂鬱になります。でもそこをぐっと我慢して、ちょっと考えてみないことには、農薬というものをちゃんと理解できないと思うのです。

食の問題は白黒つけ難い

絶対に安全なんてあり得ない

さて、毒性は確率であるという話をしましたが、今スーパーに並んでいるものを食べて、それが原因で死んでしまう確率なんていうのは、かなりゼロに近いはずです。ところが、それをゼロといつてしまわなのがミソで、毒性がゼロというのはありえないことなのです。危険性が大きかったときに確率を1%減らすに比べて、最後の1%の危険性を減らして0にするのはとても大変なことだと言われています。それは農薬に限らず、食品添加物や、流通の弊害にも言えることです。

例えば、流通による異物混入などの弊害の可能性が、運ばれる時間だけに比例するとしたら、その危険性を50%から49%にするのは簡単(地元で取れた食材を買うなどすればOK)で、実践しておられる方も多いと思いますが、危険性を0にするとなると、自給自足でもして運ばれる時間を0にせねばなりません。これは大変な手間で、別の問題を引き起こしそうだということは想像に難くありません。

合理的な判断とは

このような状況で食べ物を選ぶ消費者にとって、良い判断とはどのようなものでしょうか。経済学風に言うと、合理的な判断(最適な「危険度」の選択)ということになるのですが、それは、危険性を1%減らすことでの便益(安心感など)とそれに伴う費用(値段から手間まで)を比較することによってはじめて可能になります。しかしそれは、実際にはとても難しいことです。それは、

危険性が1%減るということの解釈が難しく、それによる安心感が人それぞれ違うからです。また、同様に生産者も、難しい選択を迫られているのだと思います。

食を考える

ややこしい話をしてしまいましたが、私は「食」というのは本当に複雑で、考えるのが大変なものだと思っています。その一方で、人は何かを食べないと生きていけません。ある程度考えて、なるべく良い食べ物を選ばなければいけないのですから、困ったものです。

私はこの農薬ゼミに関わる以前から、「野食」というちょっと変わった活動をしていました。私たちが現代の食生活、食文化に対して“なんとなく”抱いている危機感のようなものから始まった活動で、ゲテモノからサバイバル食までいろいろなものを食べ、いろいろな人の話を聞き、何が問題なのかを議論しようというものです。だいぶいろいろと体験し、考えてきたつもりですが、活動をすればするほど「食」については何が良くて何が悪いのか、わからなくなってしまいます。

しかし、わからないということは、学生にとっては面白いということです、人にとっても身近なのに非常に複雑な「食」というものについて、もっともっと勉強していきたいなと思っています。皆さまも、みかんを食べながら、ちょっと考えてみると面白いかもしれません。食についてちょっと考えてみませんか。(まつむらみさき=総合人間学部3回生)

(参考)

『環境経済政策学の基礎知識』環境経済政策学会編、有斐閣、2006

野食計画 HP <http://www.yashoku.net>

「省農薬」とは

石田 記郎

跡を重ねたためだろうか、一年の過ぎ去るのが早すぎるようだ。先月の仕事がまだ終わっていないのに、今月が過ぎて来月になっていく。焦ってみてもしようがないが時の速さに身が付いていかないのが老いかもしれない。なんてことをいうとゼミの若者から馬鹿にされるかもしれないが、年相応の仕事だけはしておこうと思う。この原稿は二ヶ月後に出荷するミカン箱に入れるニュースレターに載せるので至急書くようにとのお達しがあり、明朝から二週間の予定で中央アジア・カザフスタンへの出張に出かける前夜に書いている。

30年前に「農薬は省くべき存在である。省き方は作目、風土、技術によって異なるから、省く方向性を大事にする考え方を深めるべきである」と考えて「省農薬」という言葉を使いました。当時は何を馬鹿なことを言っているのかと睨られたものである。それから長い年月が経ち、時代が変わり、社会は「省農薬」などは生温い、無農薬でないと駄目だという雰囲気である。もちろん、そんな農業はまだ

まだ弱小集団であるが、市民社会の頭だけはその雰囲気の中にある。無農薬が実現できれば大いに結構なことであるが、それを実現する道筋を示す義務を負わない議論には興味がない。こんな頃な考え方をしているから、無農薬という言葉は積極的に使ったことはない。目指すは農業全体が「農薬は省くべき存在である」という認識に立ち至る社会の確立である。

このところ、消費者の中で農薬が話題の中心を占めるようになった。その契机が中国産の「毒餃子」や「毒インゲン」事件であるなら悲しい。両方の事件とも、日本の輸入食料問題であって、手近な毒物として農薬を使った事件で、その検出濃度から見て、病害虫防除で使用した農薬の残留問題ではない。私たちが確立しなければならない農業での農薬問題とは思えないが、「農薬は怖い」だけをばら撒いていると思うのは間違いただろうか。もちろん農薬をこのように弄ぶ犯罪を容認するものではない。テレビのミステリードラマが数ある中で私のお気に入りのひとつに消防調査官？が主役の番組がある。火災の原因究明を本務とする消防官の活動の物語である。火事で妻をなくした過去を持つ主役の台詞「火を弄ぶやつは許しちゃおけない」と言うのがある。毒入り食品事件は、まさに弄ぶ輩の事件で、許すことはできないが、だから農薬は怖いというだけでは駄目だと思う。農業現場にたち、農民の苦悩を共有する中から農薬農業問題を議論し続けたい。(いしだのりお=京都学園大教授)



2007年省農薬アンケート結果

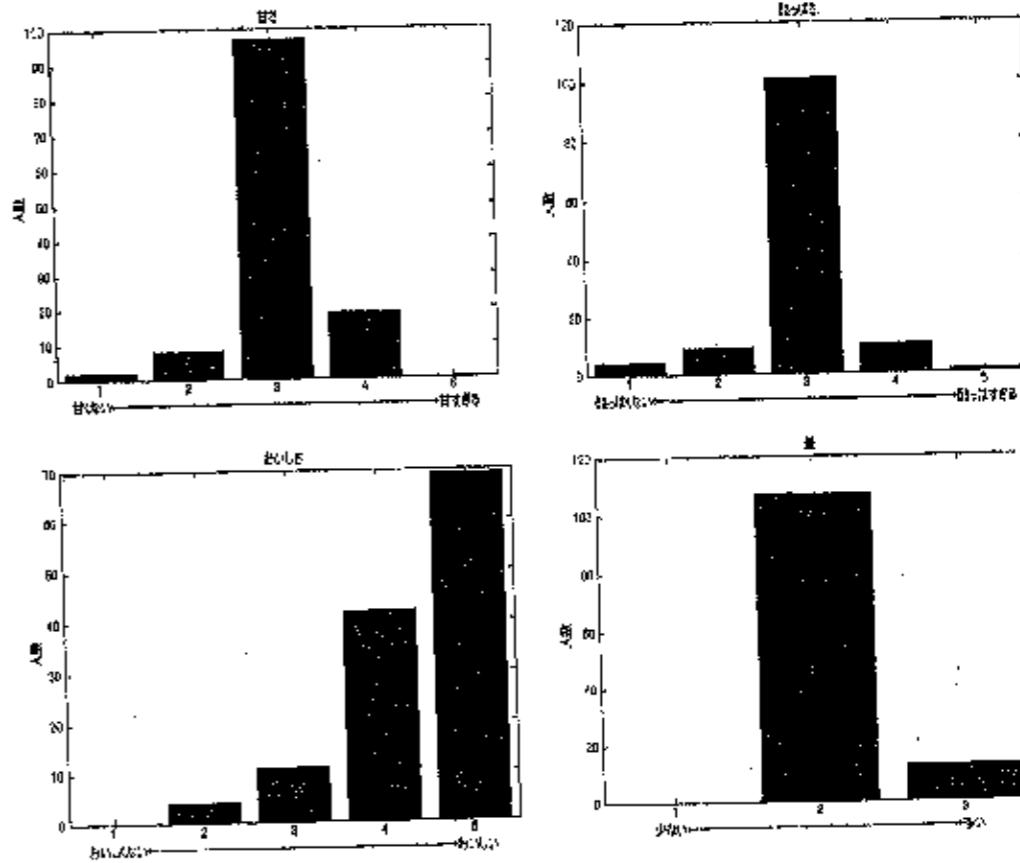
富山 博喜

おかげさまで昨年度はミカンを2200箱を完売することができました。ミカンに同封していたアンケート調査に延べ127人が答えてくださったので、この場を借りて結果を報告したいと思います。図を見ていただければわかると思いますが、ほとんどの方が甘味、酸味、量ともに適当であり、おいしいと言われています。

では、ここでよく聞く感想や意見を紹介します。まず多い意見として「小さいミカンが多いすぎる。選果してはどうか」といわれます。確かに省農薬ミカンは、選果をしていませんので粒が不ぞろいなうえに、宅配便の性質上中身を見て選ぶことは出来ません。ですから期待に添えず、予想以上に粒が小さいということは十分にあります。その点は申し訳ないと思います。ただ、やはり選果をするとその分のコストがミカンに上乗せされると、「ミカンは小さいほうが、味が濃くておいしい」、「子供たちは不ぞろいさを楽しんでいる」など肯定的に考える方も大勢いらっしゃいます。農薬ゼミとしては、やはり農作物は工業品ではなく生き物なので規格が統一されないのは当たり前である

と考えています。規格のそろった「見た目の良い」農作物に対して、その意義を問いただすというのがゼミの主眼でありますから、選果はしないほうが良いと考えています。ですから、ミカンの大小による味の違い等を楽しんでいただきたいと思います。次に多かったのが、「傷んだミカンが多い」ということです。収穫のとき傷が出来るとそこから土壤にいるカビの胞子が入りカビる原因となります。防腐剤などを使わないのでそうならないよう細心の注意を払って収穫はしておりますが、やはり輸送中に重みでつぶれたり割つくるものもあると思います。あまりに傷みがひどいものが多い場合についてはお知らせいただければ何らかの対処をいたします。また、届いたミカンは新聞紙に広げてよく乾燥させてください。ほかにも「安心して食べられる」「送り先に評判がいい」「皮も干して料理に入れたりしています」なども多かったです。ただ、ミカンの皮についている黒い点はヤネカイガラムシというムシなので、私個人としてはその部分は食べないほうが良いかと思います。面白い意見としては「傷んだミカンのほうがおいしい」とか「農薬ゼミではなく自然食ゼミに名前を変えてみては?」「ほかの果物も扱ってほしい」等がありました。名前については検討中で、ほかの果物については今は扱うつもりはありません。

アンケートを読んでいて実にさまざまな人がいるということを実感しました。農薬ゼミはいろいろな人に支えられて、活動を続けられていることを改めて知ると同時に、メンバーの一人としてうれしく思います。今年も皆さんのご意見をお待ちしております。(とみやまひろき=農学部4回生)



終わりに

伊藤 翔

まずはここまで News Letter を読んでいただきありがとうございました。はじめにの項でも触れられていますが、今年はゼミに新しいメンバーが加わりました。今回この News Letter の編集を仰せ付かった私も今年から新しく参加した人間の一人であります。どんな内容を期待されているのか、どのようなことを伝えるべきか、悩みましたかいかがだったでしょうか？ 僕かでも、ほほう、と感じていただければ幸いです。

さて、農業ゼミの活動はもうおよそ 30 年続いていると聞きました。30 年、私の生まれる以前から続いてきたという事実に非常に驚きました。メンバーは次々と入れ替わっていっても一つの事に対して 30 年向き合ってきた、連綿と続く中に自分も入ったのだと考えると非常に不思議な感覚を覚えます。そしてまた、メンバーがいるだけでなく、ミカンをご愛好くださって、農業ゼミの活動を応援してくださる方々の存在があってこそ、ここまで続いたのだろうと感じます。

私自身は一年目、まだ省農業ミカンについて僅かしか知らず、目の前に広がった大量のミカンの木に圧倒されるばかりです。これまで農業ゼミを見てきた方々に比べれば、知らないことも多いでしょうが、これまで続いてきた歴史を知り、それを深化させ、農業ゼミとともに成長できれば、と考えています。

新参者の私が言うのも度かもしませんが省農業ミカンはまだまだ続いていきます、これから社会において必要な存在だと感じています。これまで農業ゼミを応援してくださった方も、初めて知ったという方も、ミカンとともに成長する農業ゼミ、そしてメンバーを感じ、これからも見守っていただければ幸いです。この News Letter がミカンと農業ゼミを感じる一助となつていれば、編集したものとしてこの上なくうれしいことです。(いとうあきら=農学部 3 回生)



今年もミカンをお買い上げいただき、 ありがとうございました。

このミカンは食べる人と作る人の恩全を念頭に置き、農薬をできるだけ使わずに栽培されています。市販のものと比較して、器量は良くないかも知れませんが、懐かしい自然の甘みと酸味をあじわうことができます。

ミカンを長持ちさせるために

箱の中のミカンをいちど新聞紙の上でころがして、余分な水分を飛ばし、よく乾いたら箱の中に戻して、風通しのよいところで保存して下さい。また痛んだミカンがございましたら、見つけ次第取り除いて下さい。

このようにしていただくと痛みにくくなり、条件次第では数週間保存できます。

京大農業ゼミ

自主活動ゼミ、1978年京都で発足。

1967年和歌山のミカン園にて起きた農薬中毒事故をきっかけに、

「農薬は減らせる」を合言葉に学習活動を続けています。ゼミの特徴は、単に「農薬は減らせる」と主張するだけでなく、和歌山の省農業ミカン園をフィールドとして、実際に農薬を省いたらどうなるのか、農薬を減らして栽培したミカン園では害虫や病気がどうなるかを、栽培に関わりながら実践的に調査・研究を続けてきました。

その調査のための基本となる農業や環境に関する知識や理論を勉強するゼミを毎週金曜日に開催しています。

興味を持ってくださった方はお気軽に下記のお問い合わせ先にご連絡の上、是非一度足をお運びください。

ニュースレター 第20号

発行所 京大農業ゼミ

〒 606-8227

京都市左京区田中里ノ前町 21 石川ビル 30

TEL&FAX 075-711-4832

Email kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp

URL <http://dico.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP/homepage.html>